SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

塗装業から見る兼業という働き方

メタデータ	言語: ja 出版者: 静岡大学人文社会科学部社会学科文化人類学分野 公開日: 2023-02-03 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 大石, 啓翔 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10297/00029332

塗装業から見る兼業という働き方

大石啓翔

1　はじめに
2　蒲原のおもな産業
　2.1　農業
　2.2　漁業
　2.3　個人商店
　2.4　水産加工業
　2.5　塗装業
3　兼業という働き方
　3.1　ペンキ屋と漁師の兼業
　3.2　個人商店とサクラエビ漁船乗組員の兼業
4　考察
5　おわりに

1　はじめに

私は今回の実習調査を行うまで、蒲原という町に訪れたことがなかった。調査の下見に初めて訪れ、感じたのは蒲原で生きる人々のエネルギーであった。道を歩けば酒屋や魚屋など昔ながらの個人商店が目を引き、海沿いを見れば削り節の加工会社や工場などが立ち並ぶ。私は蒲原という土地でどのような産業が営まれているのか、蒲原で暮らす人々の生業に興味を持つようになった。そこで蒲原の産業について、文献調査、また商工会の方々への聞き取り調査を進めるうちに、蒲原が塗装業の町としても知られていることを知った。古くから半農半漁の町として農業、漁業を盛んに行い、また水産加工業や金属工業に多くの人々が従事する傍らで営まれてきた、少し浮いた存在にも見える塗装業に、私は強く興味を惹かれた。またそれと共に、蒲原という限られた地域の中だけで、ここまで多様な産業が営まれてきたのだということに驚いた。そこで、私は特に塗装業に注目し、蒲原の産業の歴史、現状を調査することで、蒲原に生きる人々の生業、生きるための営みを明らかにしたいと考えた。

本章では、まず蒲原という地域のなかから立ち上がってきた産業を見ていく。というのも、蒲原では戦時下の 1939（昭和 14）年、アルミニウム需要の高まりを受け、生産拡充を目指す国策の一環として日本軽金属株式会社蒲原工場が設立された（静岡市編　2007：4）。これにより、蒲原の東部一帯は大規模な工場地帯となり、町の産業形態は大きく変化した。しかし本章では、農業や漁業、個人商店や水産加工業など、蒲原地区の自然や地理、人々の暮らしの中から立ち上がってきた産業に焦点を当てる。そのため、国策の一環として外部から誘致されたアルミニウム精錬業については、それらと性質が異なるため扱わない。

このように、地域の人びとの暮らしの中から立ち上がってきた産業に焦点を当てることで、蒲原の人々の柔軟な職業選択のあり方に注目する。そのうえで人が生きる上での職業や生業のあり方について問い直してみたい。

2　蒲原のおもな産業

本節では、農業、漁業、地域に根付く個人商店、水産加工業といった蒲原地区の自然、地理、人々の暮らしのなかから立ち上がってきた産業について述べていく。なお、本節の記述は『蒲原町史』（静岡市編　2007）、および蒲原地区の商工業の発展のために活動する商工会の方への聞き取りから得られた資料をもとにしている。

2.1　農業

まず、農業の概要を、『蒲原町史』（2007）を参照しながら述べていく。蒲原地区では、山間地においては温暖な気候と水はけの良い土地を生かした温州ミカン、また東部の平坦な地区では水稲を主要な作物としてきた。特に山間地での温州ミカンの栽培は、戦後から 1960 年代後半まで高い収益性と安定により隆盛をみた。しかし、1972（昭和 47）年の柑橘類の大豊作による価格の低落を機に、全国の新興産地の台頭、他の果物への消費転換といった要因から、低迷状況をきたした。一方、東部地域での水稲栽培も元々自家消費中心の栽培であったが、高度経済成長期下での雇用増加による就農者の減少、農地の宅地化により作付けが急減した（静岡市編 2007：226-227）。

表 1 は『蒲原町史』の第 3 章「産業・経済」の第 1 節に記載された「表 3　農業生産量」を転載したもので、1996（平成 8）年から 2003（平成 15）年までの蒲原地区における農業生産量の推移を示している。これを見ると、1996 年から 2003 年の間に、温州ミカンは 50%減、柑橘類では 45%減、水稲では 67%減と生産量の大幅な減少が見られ、現在ではさらに低下していると考えられる。

調査中に話を聞いた「フラワー大石」の店主・大石雄策さん（男性、57 歳、蒲原小金在住）によると、ミカン農家だった大石さんの父も、ミカンが獲れなくなったことで農家だけ

では生活できなくなり、植木屋と花屋を始めたという。このように、古くから半農半漁の町として栄えた蒲原であるが、主な農産物であったミカンが大きな打撃を受けたことで、現在の農業は長期的な低迷状況にあることがわかる。次に、農業とともに蒲原の第一次産業の中心を担ってきた漁業についてみていく。

年次	みかん		柑橘類		水稲		キウイ	
	収穫高	出荷量	収穫高	出荷量	収穫高	出荷量	収穫高	出荷量
平成8年	1740	1530	90	66	15	0	43	33
9年	1430	1230	65	53	10	0	35	26
10年	1080	829	79	68	10	0	42	38
11年	1240	1090	76	61	10	0	50	40
12年	963	825	80	64	10	0	56	45
13年	1190	1020	75	56	10	0	50	40
14年	1060	770	67	51	5	0	50	40
15年	885	760	50	39	5	0	57	46

単位：t

表 1　農業生産量

出典：『蒲原町史　第三巻』（2007：228）の表 3 から転載

2.2　漁業

続いて、漁業についても『蒲原町史』（2007）をもとに述べていく。駿河湾での漁業といえばサクラエビ漁が有名であり、蒲原の漁業もその漁獲量のほとんどがサクラエビである。サクラエビ漁の歴史は浅く、明治期に由比（静岡市清水区由比）の漁師の網が深く潜ってしまい、偶然大量のサクラエビが獲れたことが始まりとされている。その後すぐに蒲原でもサクラエビ漁が本格的に行われるようになったという。

1968（昭和 43）年、当時の蒲原町と由比町の漁業協同組合が合併し、由比港漁業協同組合を結成して以来、由比と蒲原の漁業は、サクラエビを主軸に、シラス漁と定置網漁を従とした形態が続いている。特にサクラエビ漁は、駿河湾に限定された水産物として全国的に周知され、現在でも水揚量、水揚金額ともに非常に大きな割合を占めている。

また、『蒲原町史』（2007）によると、2007 年当時にはサクラエビ船主で構成される蒲原町桜えび船主会や、蒲原町桜漁会など、サクラエビ漁に関係する団体が多く存在し、漁に関する取り決めの決定や産業フェアといった町の行事への参加などを行っていた（静岡市編 2007：241-249）。

古くから蒲原で魚屋を営み、蒲原の漁業をよく知る「秋田屋」の店主・利勇二さん（男性、76 歳、小金在住）によると、昔の蒲原の漁師たちの多くは、ミカン農家など漁以外の仕事に兼業で従事していたという。こうした生業のあり方は半農半漁の町として栄えた蒲原で

はごく普通の生活だったのだろう。またミカン農家以外にも、塗装業を兼業する漁師も少なくなかったそうだ。

以上のように、蒲原地区における漁業は、サクラエビ漁やシラス漁を中心に栄えてきた一方で、農業や塗装業という他の産業と兼業されてきた。こうした漁業の在り方からは、蒲原地区に見られるさまざまな産業において、兼業という働き方が大きな役割を持っていることが伺える。続いて次項では、個人商店についてみていく。

2.3　個人商店

『蒲原町史』(2007）によれば、町史が出版された 2007 年当時、全国的に人口の減少をはじめ消費者ニーズの多様化、生活様式の変化などを背景に消費者行動が大きく変化し、大型店舗、コンビニエンスストアなど新たな業種・業態店の進出が目立つとともに、消費者の購買先はますます広域化していたという。蒲原地区でもこの流れは強く、1999 年、新蒲原駅前に大型量販店（イオンタウン蒲原）が出店したことで、町内の小売店は大きな影響を受けた。2004 年の商業統計調査結果によれば商店数は 202 店で、1997 年からの 7 年間で 30 店減少している（静岡市編 2007：252-253)。

蒲原における小売店の減少については、聞き取り調査からも知ることができた。1994（平成 6）年から静岡市清水商工会蒲原支所に勤める青木一彦さん(男性、53 歳、草薙在住)によると、現在までに個人商店や小規模なスーパーといった小売店は確実に減少しており、自分が蒲原に来た頃と比べてその差は目に見えてわかるほどとのことだった。その一方で、サクラエビやイワシの削り節など地場産品を扱う飲食店などはまだ残っているという。小売店が減少した要因としては、やはり 1999（平成 11）年のイオンタウン出店の影響が大きいという。しかし、そうした大型店に対抗するべく、蒲原の個人商店でのみ利用できる商品券の発行や、「宿場祭り＆産業フェア」など、商工会としてもさまざまなイベントを通じ、地域の商業の活性化を図っているそうだ。

また、数値に注目すると、蒲原の商業は衰退の一途をたどっているようにも見えるが、実際には新たに蒲原に店を構える人も増えているという。2018 年まで商工会長を勤めた、「株式会社エイシンフーズ」代表取締役の杉浦英昭さん（男性、72 歳、小金在住）によれば、特にここ数年、焼き菓子店や焼き芋店など、女性一人の個人事業主が増加したという。しかし、やはり何もしなければ徐々に衰退していくのは仕方ないため、商工会などが主催し、イベントなどを継続して行っていくことで地域の活性化につなげたい、と語っていた。

また、そうした状況の中でも続いている商店は、さまざまな経営努力を行っていることも分かった。「やまだ酒店」を経営する山田明弘さん（男性、66 歳、新田在住）もその一人である。祖母が昭和初期に開業した店を継いだ山田さんによれば、店の売り上げは 1980 年代後半から 90 年代前半が最盛期だったが、その後は徐々に経営が厳しくなっていったという。そこで、経営を維持するために店内でピザを焼き、車で移動販売をしたり、店内の一部をバーのように改装して新しい客を呼び込んだりと、さまざまな工夫をしてきたという。酒屋に

限らず個人商店すべてが抱える問題としては、やはり安く買える大型店を利用する客が増えたことや、後継者不足などを挙げていた。実際、昔は蒲原にも 16 軒以上の酒屋があったものの、現在では 5 軒しかないという。

ところで、やまだ酒店の経営努力の一環として、店内の一部をバーのように改装したという話があった。このように、もとは酒類の小売店だったが、店内で飲めるように改築して居酒屋にした店が蒲原には多く見られた。これは、店を続けるための工夫として小売業と飲食業を兼業した例と言えるだろう。次に、水産加工業についてみていく。

2.4　水産加工業

蒲原地区では、古くから水産加工業も盛んに行われてきた。富士川河川敷で行われるサクラエビの天日干しは有名だが、その他にもイワシやカツオの削り節の事業所が数多く存在している（水産加工業については、板倉の第 4 章も参照）。

前述のエイシンフーズ代表取締役の杉浦英昭さん（男性、72 歳、小金在住）によれば、大正初期に、蒲原で初めて削り節が生産され始め、そこから徐々に業者、工場の数が増えていったのだという。秋田屋の利勇二さん（前述）は削り節の工場について、「工場で働く活気のある若者たちが夜は船に乗って漁に出ていた」と語った。南北を海と山に囲まれ、平坦な耕作地が少なく、港もない蒲原では、第一次産業のみに依存して生計を立てることが難しかった。そのため、削り節の工場は人々の格好の働き口になっていったのだと考えられる。そしてここでも、サクラエビ漁などとの兼業がよくみられたことがわかる。次に、塗装業について述べる。

2.5　塗装業

蒲原は、古くから塗装業の町としても知られている。『蒲原町史』（2007）によれば、町内の塗装業は明治末期ごろに始まったとされ、当時これといった工場もなく、現金収入のなかった半農半漁の町に根付き、大正から昭和にかけては多数の塗装職人が全国各地の塗装工事に出張するなど進展を見せたという（静岡市編 2007：272-273）。

静岡市清水商工会蒲原支所の青木一彦さん（前述）によると、現在でも蒲原地区では 27 の事業所が、塗装業として商工会に登録されており、未登録のものも含めればさらにその数は多いという。今では蒲原の住民でも知らない人が多いが、かつて蒲原は「鋼橋塗装発祥の地」とも呼ばれ、古くから塗装業の盛んな地であったそうだ。現在、日本全国で塗装業を手掛ける会社を見ても、東京タワーの塗装を手掛けた「磯部塗装株式会社」など、蒲原にゆかりのあるものが少なくない。そうした経緯をみても、塗装業は蒲原という地域から立ち上がった特有の産業であると言える。

蒲原で三代に渡り塗装会社を営む「小林塗装」社長の小林裕規さん（男性、38 歳、蒲原新田在住）によると、蒲原の塗装の始まりは、漁師たちによる船の塗装であったという。現在でも同じだが、漁船の船底には、貝やフジツボがこびりついてしまう。明治期、漁業が盛

んに行われていた蒲原において、そのこびりついた貝やフジツボをはがすのは、その船に乗る漁師たちであった。一方、橋や建物の塗装、塗り替えを行う際、重要になる作業が塗料を塗る前のさび落としであるという。このさび落としが十分に行われているか否かで、塗り替えた塗装の完成度や寿命が左右されるそうだ。さびを落とし、塗装の土台を作る作業を「ケレン」といい、このケレンが、蒲原の漁師たちが行っていた船底の貝をはがす作業によく似ていたことが、蒲原で塗装業が始まるきっかけになったという。

蒲原における塗装業のはじまりは漁師の持っていた技術にあり、塗装と漁業は密接に関わっていた。ではなぜ、塗装は蒲原の漁師たちに受け入れられ、蒲原の産業として今日に至るまで続いてきたのか。小林さんは、その要因は当時の蒲原の漁師たちの生活形態にあるという。

現在でも、漁業を生業として生活する場合、その収入は漁獲量に依存し、安定した収入を継続して得ることは難しい。明治期の漁業なら尚更である。天気や海の状況によって漁に出られない時もあれば、漁に出られても水揚量が少なく収入が得られない場合もある。そのような極めて不安定な生活形態の中で、塗装という仕事は、漁師たちの技術が応用できる点、大掛かりな道具や作業場が必要ない点など、漁業との兼業に非常に適していた。つまり、漁に出られるときは漁師、出られない日には塗装の仕事というように、兼業の形で生計を立てていたのである。

このように、明治期に蒲原で生まれた塗装業は、漁師たちの不安定な生活を支える一つの手段として、しばしば漁業と掛け持ちされた。現在では、塗装業は専門の職人たちの仕事となり、漁師との兼業は少なくなった。しかし、複数の業種を掛け持ちする働き方は、その形を少しずつ変えながらも現在も残り続けている。

以上みてきたように、半農半漁の町として栄えたと言われる蒲原地区では、農業や漁業といった第一次産業の他にも、商業や水産加工業、塗装業など多種多様な産業が生まれてきたことがわかる。そしてさらに注目したいのは、蒲原の人々の職業への柔軟な選択、そしてそこから生まれるさまざまな業種間の兼業である。ミカンが売れればミカン農家になり、不作になり生活に困ると植木屋や花屋になる。また酒屋として酒の売り上げが落ちれば、料理を作って居酒屋に改築する。漁師たちも、漁に出られない期間はペンキを塗り、塗装業で生計を立てる。このように蒲原では状況に応じて、生計手段を柔軟に選択する姿が見られる。

次節では、この蒲原の人々の生活にとって大きな意味を持ってきた柔軟な職業選択、兼業の在りようを、いくつかの実例を交えてみていく。

3　兼業という働き方

ここまで、蒲原の自然、地理と密接に関わり、人々の暮らしのなかで生み出され、現在ま

で続いている産業について見てきた。これを通して分かったのは、状況に応じて柔軟に職業を選択する人々の生き方であった。また、明治期から漁師たちがしていたような、複数の職業に掛け持ちで従事する兼業の形も明らかになった。そこで本節では、この兼業についていくつかの実例を交えてみていく。まず、古くから蒲原で魚屋を営み、漁師たちの生活を目にしてきた「秋田屋魚店」の店主・利勇二さんに聞いた話から、漁師たちの兼業についてみていく。そして、実際に個人商店の経営と漁師の仕事という異なる業種の兼業を行っている「フラワー大石」の店主・大石雄策さんの事例から、蒲原で現在も続く兼業という働き方について述べる。

3.1　ペンキ屋と漁師の兼業

本項では、まず明治期に始まり、かつて多く見られた塗装と漁師の兼業について、1955年頃から秋田屋魚店を営む利勇二さんに聞いた話をもとに述べる。

〈事例 1　利勇二さん　(男性、76 歳)〉

利勇二さんは、秋田県出身で、1955 年頃から蒲原小金で秋田屋魚店を経営しており、蒲原の漁師たちとも広く関わりを持ってきた。塗装業と漁業の兼業について尋ねると、やはり昔の蒲原の漁師たちの中には、ペンキ屋をやっている人も多かったという。当時から、蒲原の漁業の中心を担っていたのはサクラエビ漁師であった。サクラエビ漁は、漁期が春と秋にあり、漁期以外の季節には漁師たちは主にペンキ塗りの仕事をしていたそうだ。また、漁期でも、雨や風で船が出せない日はあり、それがわかるのも当日になるため、何かと融通の利きやすいペンキ屋をやっていたのだろうとも言っていた。

また、その頃は漁師とペンキ屋以外にも兼業の形が見られたという。当時のサクラエビ漁は夜引きと言われ、夜から朝方にかけて漁が行われていた。そのため、夜引きの船に乗る漁師たちの中には、昼間に別の仕事をしている人が多かったそうだ。そしてその多くが、当時から盛り上がりを見せていた削り節などの水産加工業に従事する人々だったという。体力のある若者たちは、昼間に工場で働き、夜にはサクラエビ漁に参加するという生活をしていたそうだ。また当時のサクラエビ漁の手法としても、機械化が進んでおらず、現在よりも多くの人出が必要であったために、とにかく力仕事のできる若者たちが駆り出され、漁に出ていたそうだ。

以上みてきたように、蒲原ではかつて、サクラエビ漁師たちが塗装業にも従事していたことがわかる。その実態は、「兼業」というよりも、その日ごとにできる仕事を行い、一つの職業に固定されない柔軟な生き方に近いのかも知れない。また、利さんが塗装の仕事に携わる人々のことを「ペンキ屋」と呼んでいたことにも注意したい。現在、塗装業を仕事にする人々は「塗装職人」と呼ばれ、職人たちは塗装に関する専門的な知識や技術を期待される。漁師の不安定な生活を支えるため漁の合間に行われていた「ペンキ屋」との間には、当然な

がらその専業性、専門性においてかなり差があると考えられるだろう。

また、「小林塗装」社長の小林裕規さん（前述）は、現在塗装業と漁師の兼業がほとんど見られないということについて、塗装業界が大きくなり塗装職人が一つの職業として成立するようになったこと、また塗装職人に求められるようになった専門性が、兼業をするうえで高いハードルになっているのではないかと語っていた。

このように塗装業と漁師の兼業があまり見られなくなった一方で、蒲原では現在も自営業などと漁師の仕事を掛け持ちする人がいる。次項では、その事例として、個人商店を経営しながらサクラエビ漁船に乗り漁を行う、「フラワー大石」店主の大石雄策さんから聞いた話を取り上げる。

3.2　個人商店とサクラエビ漁船乗組員の兼業

次に、前項で紹介したペンキ屋と漁師の兼業の実態を踏まえ、現在もみられる兼業について、花屋を営みながらサクラエビ漁にも出ている大石雄策さんの事例を挙げる。

〈事例 2　大石雄策さん（男性、57 歳、蒲原小金在住）〉

大石雄策さんは、蒲原小金にある生花店・フラワー大石の経営者である。大石さんの祖父は蒲原でミカン農家を営んでいたそうだ。しかし、大石さんの父の代になり、農業だけでは生計が立てられなくなり、植木屋と花屋を始めたのだという。そして現在、雄策さんが花屋を継ぎ、弟が植木屋を継いでいる。

大石さんは、昼間はフラワー大石を経営する一方、夜は船に乗り、サクラエビ漁に出ているそうだ。その頻度は、春と秋の漁期中ではほとんど毎日で、17 時に由比港に集まり 18 時に出航、漁が終わるのは大体 21 時半から 22 時頃だという。漁に出るか否かは、その日の天気や海の状況によって判断されるそうだ。大石さんがサクラエビ漁の船に乗り始めたのは約 2 年前だという。それまでその船に乗っていた乗組員が一斉にやめてしまい、人手不足に陥っていたため、船長の知り合いであった大石さんに声がかかったとのことだった。漁船を持ち、船長を務める人を「船元」、雇われて船に乗る人々を「船子」というが、大石さんは船子としてサクラエビ漁船に乗っていることになる。

現在、その船には船元とその親族が船頭として 2 人、ふだんはシラス漁に従事する漁師が 6 人、大石さんを含め自営業者が 2 人、定年退職したサラリーマンが 2 人、合計 12 人が乗っているのだという。サクラエビ漁は船を 2 艘使って網を引く二艘引きという方法を取っていて、12 人が 6 人ずつに分かれ漁をするそうだ。このようにサクラエビ漁船にさまざまな業種の人々が乗り、船子を務めることは珍しくないという。むしろ、現在サクラエビ漁を行っている船で、サクラエビ漁師だけが乗っている船などまずないそうだ。どの船を見ても、大石さんのような自営業者や退職したサラリーマン、またシラス漁師たちが乗組員の多くを占めている。

大石さんはその理由として、今ではサクラエビ漁だけで生計を立てることが難しいから

だと語っていた。そもそもサクラエビ漁だけをして生活できたのはかなり昔の話だという。今よりも漁獲量が多く、値段も高かった最盛期には、実働期間が 1 か月程度でも 500 万円以上稼いでいた、といった話も聞いたことがあるそうだ。しかし、その一時期を除けば、ほとんどの漁師はペンキ屋やミカン農家など別の仕事をやっていたという。現在、サクラエビ漁の取れ高は、半分が船長である船元に、そしてもう半分が船子に分配されるのだという。船子への分配金額に関しては、漁獲量に依存するため一概には言えないが、多い時には一晩数万円儲かることもあれば、数百円程度のこともざらにあるそうだ。

塗装業と漁師の兼業について尋ねると、確かにそういった話は昔からよく聞くそうだ。今では塗装会社や職人も専門的になってきて、漁師との兼業は少なくなったものの、そういう人はまだいるはずだという。また、大石さんは漁師が兼業していた当時の塗装について、「塗装業」というよりも「ペンキ屋のバイト」のようなイメージだったように思うと語っていた。しっかりとした仕事というよりも、日雇いのバイトのような感覚だったという。今の 70 代から 80 代の人々が働いていた当時は、一つの仕事に就くというよりも、その日できる仕事を探してやるような時代だった、という話も聞くそうだ。昔はそれが当たり前の時代であったため、当時を知る年代の方が社長を務める会社では、今でも夜のサクラエビ漁があるときには会社を休ませてくれるような所もあるという。

以上の大石さんの語りから分かることはまず、兼業という働き方が、現在でも形を変えながら続いているという点である。大石さんが昼間に花屋を経営しながら、夜にはサクラエビ漁に出ているように、塗装業に限らず漁業と別の職業の兼業という形態で働く人は少なくない。シラス漁師も多く乗っているという話だったが、シラスは基本的に朝方に漁をするため、朝はシラス漁、夜はサクラエビ漁という形で、同じ漁師とは言え兼業と呼ぶべき形態となっているという。

また、漁業と塗装業の兼業が盛んに行われていた当時の、塗装業に対するイメージも見えてきた。大石さんは語りの中で、当時、兼業されていたのは塗装業者というよりもペンキ屋のバイトのような印象だと述べていた。現在のように、高い技術や専門知識を持った塗装職人というイメージとは大きく異なっていたことがわかる。これは、秋田屋魚店の利さんが語りの中で、塗装職人を「ペンキ屋」と呼んでいたこととともつながるだろう。

また、大石さんの祖父はミカン農家だったが、大石さんの父の代になり、農業だけでは生計が立てられなくなり、植木屋と花屋を始めたことにも注目したい。大石さんの父はミカンの暴落、不作によりミカン農家だけでは生活できなくなり、そのノウハウを活かして植木屋と花屋を始めた。そして雄策さんは花屋を営みながら、空いた時間にサクラエビ漁に出ている。この話は、蒲原という海と山に挟まれ、平地が少なく栽培できる作物も限られた土地で、状況に応じて仕事を柔軟に選択してきた蒲原の人々の姿を表していると言える。

4　考察

これまで、蒲原地区における産業、人々の営んできた生業について、漁業と塗装業をはじめとするいわば兼業的な働き方を軸にして見てきた。第 2 章では、ミカンを中心にした農業やサクラエビ漁を中心とした漁業、また水産加工業や塗装業など蒲原という地域のなかから立ち上がってきた産業の概要を述べた。そこからは、蒲原にさまざまな産業が根付いていることの他に、それらの産業で生計を立てる人々が状況に応じて柔軟に職業選択や、兼業をしていたことが分かった。さらに第 3 章では、秋田屋魚店の主人として蒲原の漁業をよく知る利勇二さん、そして花屋を営みながら、夜はサクラエビ漁にも参加するフラワー大石の大石雄策さんの 2 人の話を取り上げた。これにより、蒲原でかつて削り節工場の従業員、ペンキ屋、漁師などを掛け持ちでしていた人がいたことが明らかになり、また、現在の兼業のあり方についても具体的に知ることができた。

私たちは職業や生業について考えるとき、無意識のうちに、誰もが一つの職業に従事し、その職業を一生、もしくはかなりの長い間続けることを前提にしてしまう。しかし、本章で述べたような蒲原の人々の柔軟で複合的な働き方を見ると、決してそうではないのだということがわかる。とりわけ、山と海に挟まれ、平地が少なく栽培できる作物も限られた蒲原という土地では、農業や漁業に一本化したとしても安定した収入が得られないことも少なくなかった。そのような土地に生きる人々にとって、職業は固定的なものではなく、生活環境やその他の理由により絶えず変化するものであった。ミカンが売れるならミカンを作り、サクラエビが獲れるなら船に乗り漁へ行き、工場ができたなら工場で働き、というように、職業は柔軟に選び取られるものなのである。たとえば、小林塗装社長の小林裕規さんの祖父は、当初、桜でんぶを製造する会社を立ち上げたが、それが上手くいかず、次に立ち上げたのが小林塗装だったという。何かがダメになれば次の仕事を見つけ、それを繰り返しながら生計を立てる人も少なくなかったそうだ。そのような生き方は、資源が限られた蒲原において、環境、社会、産業が絶えず変化し続けるなかで、人々がそれに対応し生きていくためのものだったのだと言える。

また、職業選択の柔軟性だけでなく、複数の職業を掛け持ちする兼業の在り方にも注目したい。第 4 章で事例として取り上げた大石さんの父は、ミカン農家として家を継いだものの、ミカンの価格暴落をきっかけに、農業だけで生計を立てるのが難しくなり、花屋の経営を農業と並行して始めたという。また大石さん本人も、花屋を営む傍ら、毎晩のようにサクラエビ漁にも出ている。このように、蒲原ではどちらかが本業／副業という訳でもなく、複数の仕事を同時に営む人が多く見られる。これまで、私は職業とは基本的に一つに従事するものであり、それを変えたくなったなら、辞めて次の仕事に就くというように、職業や職場への帰属はたった一つと捉えがちであった。しかし、調査を通して、職業をたった一つに固定せず、日ごとにできる仕事をするという生き方が見えてきた。

また、「職業」という括りにとらわれない働き方にも目を向けたい。塗装と漁業との兼業に関する調査を行っていると、人によって「塗装業者」と呼んだり「ペンキ屋」と呼んだりと、その呼び方に差があった。フラワー大石の大石さんは、明治期の漁師と兼業していた塗装業者を、日雇いのバイトに近いようなイメージだと語っていた。私たちは、ペンキを塗っていれば「塗装職人」、漁に出ていれば「漁師」、農業を営んでいれば「農家」というように、従事する職業を唯一とし、それをその人の属性にしてしまう節がある。しかし、人々の営みはそれほど単純なものではない。実際に、大石さんも毎日のように漁に出ているものの、自分のことを漁師だとは言わなかった。蒲原で営まれてきた複合的な働き方、兼業のあり方からは、唯一の職業を肩書とするという固定観念にとらわれない仕事のしかた、生き方の多様さが見えてくる。

ここで、私はこの蒲原でみられた柔軟な職業選択、副業について「Living for Today」という考え方を用いて再考したい。文化人類学者の小川さやかは、タンザニアの都市部における人々の生活を「Living for Today」（その日その日のために生きる）という言葉を用いて表現し、その連続として立ち現れる社会や経済の有り様を明らかにした。タンザニアの都市部に暮らすある夫婦を見ると、夫は街に出て毎日日雇いの仕事を探し、妻は毎日家で仕立ての仕事をしていると小川は言う。運が良ければ夫が給料の良い仕事を見つけ、家計は潤うが、運が悪ければ仕事が見つからず、貧しい生活を強いられる。運の良い日が続きある程度の貯金ができると、2 人は新たな仕事に手を付けたりもする。こうして夫婦は小川が観察した 6 年間に建築業、サービス業、零細製造業、商業など多様な業種を経験していた。こうした生き方を小川は、「生計多様化戦略」として分析している。つまり、一つの仕事で失敗しても、何かで食いつなぐことのできる状態にしておくという戦略である（小川 2016：56-61）。この「Living for Today」、すなわち「その日暮らし」の生き方、そして「生計多様化戦略」は、かつての蒲原の人々の生活、そして柔軟な職業選択に通じる部分がある。その日その日で仕事を探し、船に乗ったりペンキを塗ったりする。漁に出られない日でも生活に困らないように、塗装や加工業を兼業して稼ぐ手段を用意しておく。こうした生活は一見して場当たり的で計画性がないようにも思える。しかしそこには仕事のチャンスを敏感に感じ取り、いち早く新たな職を始める判断力、そして仕事を 1 つに限定しないことで、不測の事態に備えるという戦略があるのではないだろうか。

5　おわりに

本章では、蒲原の人々の柔軟な職業選択や兼業の様子をみてきた。今回の調査では、蒲原の産業という扱うテーマの広さから、さまざまな職業、年齢の方々にお話を聞くことができた。その一方で、女性への聞き取りが少なくなってしまったことが反省点としてあげられ

る。さまざまな立場の人々に話を聞く中で、当たり前だが、全ての人に人生があり、それぞれの選択があることに気付いた。一人一人の人生によって現在の蒲原の文化、風土が形成されているのだということを実感した。

謝辞

今回の調査を実施するにあたり、多くの方々にご協力いただきました。急な申し出にも関わらず、快くお時間を作っていただいたうえ、貴重なお話を聞かせていただき本当にありがとうございました。

参考文献

小川さやか
　2016　『「その日暮らし」の人類学－もう一つの資本主義経済－』光文社。
静岡市編
　2007　『蒲原町史　第三巻』静岡市。